

## 「兕雷也豪傑双六」 (九州大学附属図書館 雅俗文庫蔵)

吉田, 宰  
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4402937>

---

出版情報 : 文献探究. 58, pp.1-, 2020-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

「児雷也豪傑双六」(九州大学附属図書館 雅俗文庫蔵)



全体図



袋(右:表、左:裏)



芝神明前  
和泉屋市兵衛板

本資料は、合巻『兎雷也豪傑譚』を題材とした絵双六（請求記号：雅俗文庫／66雑z／ジラ）。柳下亭種員撰案、一雄斎国輝画、（江戸）和泉屋市兵衛版。縦71.4cm×横72.0cm。多色刷り。袋つき。

周知の通り、双六はサイコロを振って、出た目の数にしたがって駒を進める遊びだが、これには「盤双六」と「絵双六」の二種類がある。前者は将棋やチェスのように、盤上の駒を動かして遊ぶもの、後者は一枚の紙に描かれたコマ（駒）をたどって遊ぶものをいう。

絵双六は、「廻り双六」と「飛び双六」という二つの形式に大別される。廻り双六は、振ったサイコロの目の数だけ順次コマを進めるもので、今日の双六でも一般的に見られる形式。一方、飛び双六は、本資料もこちらに該当するが、各コマにサイコロの目とその行き先が記されており、出た目にしたがってコマを飛び進めていくものを指す。例えば、本資料の最下段中央にある「振出し」には、「一 妙香山／二 鼠宿／三 崎村／四 捨松／五 江之島／六 綱手」と記されているが、もしサイコロを振って一の目が出れば、振出しの右肩に描かれる妙香山のコマへと飛び進むという具合である。今日の双六ではほぼ見かけることのない飛び双六だが、江戸時代にあつては旅の道順にしたがって各地を回る道中双六を除けば飛び双六の形式が多く、明治時代初期ごろまで見られたとされている。

本資料が題材とした『兎雷也豪傑譚』は、天保十年（一八三九）から明治元年（一八六八）にかけて和泉屋市兵衛より刊行された、全四十三編（未完）に及ぶ長編合巻であり、作者は四名にわたり、美図垣笑顔、一筆庵主人、柳下亭種員、柳水亭種清の順で書き継がれていた。この合巻は好評を得て、嘉永五年（一八五二）七月二十五日からは歌舞伎でも上演され、八代目市川團十郎が主役の兎雷也を演じ、大変な評判となり、多数の錦絵も作成されたという。

本資料の右端に「柳下亭種員撰案」と記される上部には、「衣／笠」「村／田」「子八」の印がある。これは江戸出来の草紙類を扱う問屋（地本問屋）が著作物を出版するにあたって、事前に検閲を受けた際に押される検印（改印）であり、これら三顆から、本資料は嘉永五年（壬子）八月に出版許可がおりたと判断され、よって、右に述べた『兎雷也豪傑譚』の一連の流行に便乗して刊行されたものであると考えられている。

このほか、本資料のコマ絵は役者似顔にはなっていないが、袋は八代目団十郎が演じた兎雷也を意識していること、また本資料よりも前に改印を受けたまったく同じ図柄の錦絵があり、袋はその絵を写していることなどが先行研究によって指摘されている。なお掲載写真では判別しづらいが、袋に描かれる白地部分のうち、人物の衣裳、刀の柄、および大鷲の喉元には、空押し文様が施されており、細やかな意匠が確認できる。

〈参考文献〉

- 1 小西四郎・寿岳章子・村岸義雄著『双六 伝統的な日本の遊び』（徳間書店、一九七四年）
- 2 加藤康子・松村倫子編著『幕末・明治の絵双六』（国書刊行会、二〇〇二年）

※ 本解説は、多く参考文献②に基づいて執筆した。